

凡 例

大江 令子

一、本稿は本館所蔵資料に見られる蔵書印を紹介するものである。

一、従来の蔵書印譜等に紹介される機会の少なかったもの、或いは、本学及び本館に関係の深いものから掲げ
ることを心がけ、やがて他へも及ぶつもりであるが、印影の紹介を眼目とし、年代・分野等に捉われず
掲出することとした。

一、排列は人名(印の使用者名)の五十音順とする。

一、印影は原則として原寸大とする。印色は各々の原色を再現するのは困難なため、朱・墨等、近似の色を
以って示した。

一、必要と思われるものには印文の読みを記した。

一、印の使用者の経歴等、簡略な解題を付した。参考文献は一々あげないが、既刊の事典・印譜・評伝等を
参照した。

一、解題末尾に、印を採集した資料名を添えた。

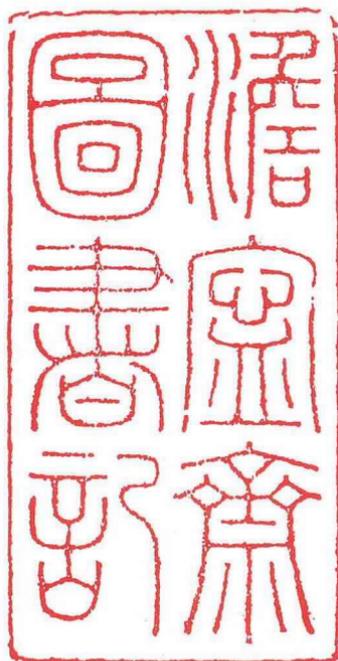
目

飯岡 義齋
伊東 玄朴
伊藤篤太郎
大口 鯛二
鹿島 則文

次

川崎 千虎
川田 甕江
執行 弘道
白井光太郎
谷 千生

花房直三郎
本間 百里
望月 三英
山中信天翁
吉田 東伍

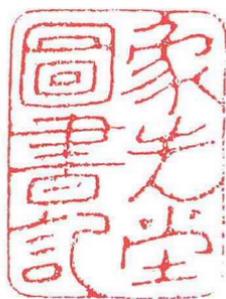
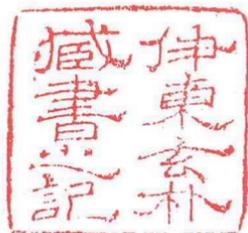


「澹寧齋
同書記」

飯岡 義齋（一七七一—一七六九）

儒者。享保二年大阪に生れる。名は孝欽、字は徳安、義齋また澹寧と号す。家は代々医を業としたが、義齋に至つて儒となった。二〇歳で浅見綱齋派の鈴木貞齋に入門、貞齋の没後は石田梅巖の心学を修めた。のち論語郷黨篇を讀んで悟る所あり、以来朱子学をきわめ一代の醇儒と称された。寛政七年没。

『七曜直日考』写本



伊東 玄朴 (1800—1871)

医家。寛政一二年肥前神崎郡に生れる。名は淵、字は伯寿、長翁また冲齋と号した。文政五年佐賀の蘭方医島本龍嘯に入門、さらに長崎の大通詞猪俣伝右衛門に蘭語を学び、ついでシーボルトに師事した。文政一一年江戸本所に開業するが、シーボルト事件に連座し入獄。その後玄朴と改名、家塾象先堂を開き、門弟四百余人を擁した。天保一四年佐賀藩医官となり、安政三年蘭方医五〇余名と諮り神田お玉ヶ池に種痘所を創立。同五年將軍家定重病のとき幕府奥医師に拔擢され、のち法橋に叙せられた。『医療正始』他訳書多数。明治四年没。

掲出印は仏・シヨメール編『日用百科辞典』の蘭語訳本より採った。なお玄朴の印は他に「冲齋書記」がある。

Algemeen huishoudelyk-, natuur-, zedekundig-
enkonst-woordenboek. Amsterdam, 1786-1792.



伊藤 篤太郎 (一八五—一九二)

植物学者。慶応元年、名古屋に生れる。母は植物学者伊藤圭介の五女小春、父は圭介の門人で入婿した延吉。幼少より祖父圭介のもとで薰陶をうけ、明治一七年ケンブリッジ大学に留学、植物学を専攻した。帰国後愛知県尋常中学、東京の立教中学等に奉職。大正一〇年、東北帝国大学理学部生物学科開設にあたり講師に就任。昭和三年の退官まで植物分類学を講じた。昭和一六年没。

伊藤圭介・篤太郎収集の本草書のコレクションは、その一部が昭和一七年に処分された後、一九年に「伊藤文庫」として国会図書館に収蔵された。

『草木図説』明治七年刊

大口 鯛二（一八四一—一九〇〇）

歌人。元治元年名古屋に生れる。本姓良岑、白樺舎、周魚等と号した。歌を伊東祐命、高崎正風に学ぶ。明治二二年御歌所に勤務、三九年寄人に任ぜられた。かたわら千種会を組織、歌誌「ちくさの花」を主宰、和歌の普及につとめた。大正五年より明治天皇御集、昭憲皇太后御集の編纂に尽力、勲五等を受けた。書もよくし、とりわけ仮名文字の権威としてきこえた。西本願寺本『三十六人家集』を世に出したことも知られる。大正九年没。昭和二年門人により『大口鯛二歌集』が刊行された。

『聴雪集』写本





鹿島 則文（二八五—二八二）

神職、国学者。天保一〇年生れ。父は鹿島神宮大宮司則孝。桜字と号した。儒書を安井息軒らに学ぶ。水戸藩の勤王党にくみして国事に奔走し、慶応元年幕府の忌むところとなり八丈島に流された。明治二年赦免され帰国、六年鹿島神宮大宮司、一七年伊勢神宮大宮司に任じられ、祭儀の復興、皇学館の設立、『故事類苑』等の出版、林崎文庫の整備等に力を尽くした。明治三四年没。

桜山文庫八万冊のうち、散逸を免れた八千冊が、近年昭和女子大学に収蔵された。

『小史五種』写本

川崎 千虎 (一八五—一九三)

画家。天保六年名古屋に生れる。通称源六、のち頼太郎。沼田月斎、土佐光文に画を学んだ。明治一一年上京し、大蔵省、商務省等に勤務、のち博物館御用掛、美術協会審査員、東京美術学校教授等を歴任、また内務省古社寺保存会委員をつとめた。画家大石真虎に私淑し千虎と号し、真虎の落款印譜を編んだ。土佐派と浮世絵派とを折衷させた画風で、有職故実画の大家として多くの門弟を擁した。著書に『小学図画入門』『名印部類』等がある。明治三五年没。

『明珍兜鑑図』写本



川田 襄江（二〇一—一八六六）

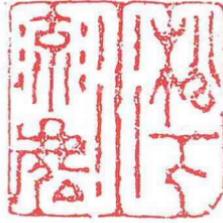
漢文学者。文政一三年備中浅口郡阿賀崎村に生れる。名は剛、字は毅卿。山田方谷、藤森弘庵らに学び、備中松山藩主板倉勝静の儒臣となる。維新後、大学少博士に任じられ、また学士院会員に挙げられた。のち宮内省に出仕、諸陵頭、錦鶏間祇候、東宮御用掛、宮中顧問官を歴任した他、東京大学文学部教授を兼ね、『古事類苑』編修にも尽力した。文章にすぐれ明治漢文学界の泰斗としてその才学をうたわれた。明治二九年没。

掲出印のある二書は昭和一三年川田家より寄贈されたもの。



『俄羅斯紀聞』古賀侗庵自筆

『日本教育史資料』明治二三―三五年刊



「松下
流處」



執行 弘道 (一八五—一八七)

実業家。嘉永六年佐賀藩士執行和道の長男に生れる。藩校弘道館に学んだ後、藩の貢進生として大学南校に進む。明治四年大隈重信の献策により、佐賀から五人の同級生と共に留学生に選ばれて渡米。七年に帰国、外務省に入る。中国厦門領事館に勤務の後外務省を辞し、一年三井物産の初代香港支店長に就任。一三年再び渡米し、起立工商会社ニューヨーク支店長となる。美術愛好家、蔵書家のクラブとして知られたタイルクラブ、グロリアクラブのメンバーとなり、日本美術の紹介に大きな役割を果たした。三三年に帰国し農商務省に入り、万国博覧会関係の業務に関わった。有力な錦絵収集家として知られ、また建築家F・L・ライトとは初来日以来親交を結んだ。昭和二年没。

管見に入った執行弘道の旧蔵書は現在のところ二部。いずれも明治四一年に本人より寄贈されたものである。

『伊勢物語』嵯峨本覆刻他

白井氏藏書

白井 光太郎 (一八三—一九三)

本草学者。文久三年越前福井藩士白井幾太郎の子に生れる。藩主松平春猷に英語を学び、東京英語学校から東京帝国大学理科大学植物学科に進んだ。卒業後東京農林学校教授となり、明治三二年より二年間ドイツへ留学、帰国後帝大農学部教授となり、大正一四年退官。我国の植物病理学の祖にして伝統的本草学の最後の権威であった。早くに天然記念物の保存を主張し、日本産餅病、桜の天狗巢病等の研究で知られた。著書に『日本博物学年表』『植物妖異考』等がある。昭和七年漢方の調合を誤り急死した。

没後その蔵書は国会図書館に入り、「白井文庫」として今日に至っている。なお白井の蔵書印には他に「白井光」の印もある。

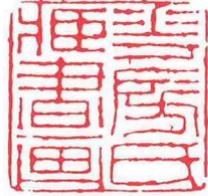
『植物図鑑』写本

谷 千生（一八三一—一八八〇）

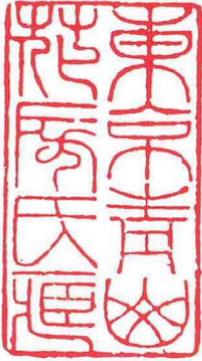
国学者。天保三年徳島藩士谷幸八の長男として、江戸三田の藩邸に生れる。初名周蔵。文久三年藩命により徳島に移り、湯浅春緒に国学を学ぶ。明治元年奥羽の役に従軍、帰国後藩の軍事係となった。六年大麻比古神社の権禰宜となり、かたわら国語の講究に励んだ。一七年徳島師範の御用係、一八年徳島中学の教授担当となる。二〇年に英人チェンバレンが文部省の委嘱を受け『日本小文典』を著すと、これを恥辱として『日本小文典』を刊行、その他『語格雑論』『詞の組立』など詳細きわまる文法論を著した。明治二二年没。

『異国
奇談和莊兵衛』安永三年刊





「花房氏
藏書画」



花房 直三郎（公堯—二三）

統計学者。安政四年岡山藩土花房瑞連（初代岡山市長）の三男に生れる。明治元年藩候により抜擢され東京に遊学、和漢の学を修め、ホルツにドイツ語を学ぶ。一二年東京外国語学校嘱託となり以後、農商務省、太政官、公使官、外務省、枢密院、内閣の諸官吏を歴任した。三〇年統計課長、のち内閣統計局の設立にあたり初代局長となり、大正五年まで二〇年にわたってその任にあった。第一回国勢調査を計画実施するなど我国の統計事業の整備に貢献した。大正一〇年没。

内外の統計関係書および各種官庁統計資料からなるその蔵書約四千冊は、大正一五年、昭和二年の二度にわたって本館に寄贈され、「花房文庫」として収蔵された。

『扶桑画人伝』明治二十二年刊他

本間文庫

本間 百里 (一七四—一八五)

有職家。天明四年生れ。陸奥一ノ関田村左京大夫邦顕の家臣。名は百里、字は伯震、通称与一、梅軒と号す。松岡辰方に有職故実を学び、あわせて高倉流衣紋方を修めた。松岡辰方撰の『織文図会』を増補したほか『有職問答』『服色図解』『尚古鎧色一覽』等の著書がある。文化一三年に八幡と姓を改めた。嘉永七年没。

本館では明治四一年、百里収集にかかる有職故実関係の写本四一八巻を収蔵、のち同じ叢書のわかれ三八巻を購入、あわせて『本間叢書』として架蔵している。

『本間叢書』写本



「桂華威書」

望月 二英（一六七—一七九）

医家。元禄三年讃岐丸亀藩医官望月雷山の子に生れる。名は乗、字は君彦、鹿門と号した。二英は通称。一族の幕府医官望月元椿の後を嗣ぎ、享保一一年御番医師に挙げられ、元文二年奥医師に進み、法眼に叙せられた。患者の貴賤貧富を問わず治療にあたり、多くの逸話を遺している。將軍吉宗に秘庫の閲覧を許され、船載の医書を涉獵、精妙の術をもって世に知られた。著書に『医官元稿』『医門多疾』『三世方』等がある。明和六年没。

『長崎諸物産実録秘中』写本



「対嵐
山房」

「月橋
居士」

「信天
翁」



「月橋」

山中 信天翁（一八三一—一八五）

政治家。文政五年三河国碧海郡東浦に生れる。名は猷。字は子文、通称七佐衛門。静逸、信天翁と号す。篠崎小竹、斎藤拙堂門に学び、諸芸に秀でた。家は代々農を業とし素封家としてきこえたが、安政頃弟に家督を譲り出京、梁川星巖、梅田雲濱ら勤王の志士と交わる。のち幽居中の岩倉具実の知遇を得、王政復古の号令の起草に与かるなど、重用された。明治政府成立後諸官を歴任、知事として東北の地にも赴いたが、のち伏見、閑院、北白川三宮家の家令となる。明治六年職を退いて京都下鴨に住み、また嵯峨の山莊を対嵐山房と称し、風雅のうちに余生を送った。明治一八年没。

『小史五種』写本

『曲江書屋 左伝快読』乾隆五四年刊
新訂批註

吉田 東伍（二六四—一九八）

歴史家、地理学者。元治元年新潟県北蒲原郡に生れる。落城、楽浪逸民等と号した。小学校教員等をしながら独学で日本史を修め、明治二四年姻戚にあたる市島謙吉を頼って上京、読売新聞に史論を載せ一躍学界に名声を得た。三四年東京専門学校講師、翌年早稲田大学教授となり、四二年文学博士の学位を受けた。早稲田大学理事として図書館事務監督にあたるなど学苑の行政に貢献した。大著『大日本地名辞書』『倒叙日本史』等多数を著した。他、『世阿弥十六部集』の校訂刊行等、音曲研究にも業績を挙げた。大正七年没。

本館には、明治四一年『大日本地名辞書』の完結を機に自身より寄贈された稿本五四五冊、および旧蔵書のうち朝鮮本約一七〇〇冊を所蔵している。その他の蔵書は郷里の新潟県立図書館へ寄贈された。

『白沙先生集』英祖二年刊



「楽浪書齋」（吉田半迂刻）

